
とある風紀の紅蓮皇帝《オーバーヒート》

白雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある風紀の紅蓮皇帝^{オーバーヒート}

【Nコード】

N7644W

【作者名】

白雲

【あらすじ】

学園都市の治安維持機関、《風紀委員》ジャッジメント。

その頂点である風紀委員長。

これはとある風紀

委員長が強大な事件に後輩たちと共に立ち向かっていく話である。

プロローグ（前書き）

色々とおかしな感じがしますがどうかよろしくお願いしますm
ー（

ブローグ

俺は昔から弱いものいじめが嫌いだった。

能力のある奴は自分を特別な奴だと思いこんで能力のない奴に暴力を振るう。

能力のない奴はそんな現実から目を背けるために自分よりも弱い奴に暴力を振るう。

そんな奴等が俺は大嫌いだった。

けれど昔の俺にはその暴力を止めることが出来なかった。

昔の俺にはそれだけの力がなかった。

そんな自分が嫌いだった。

だから頑張った。

とにかく頑張った。

頑張って頑張って頑張った。

そして俺は――

とある町の狭い路地裏、そこを2人の男が走っていた。

男1「ヒヒッ！まさかこんなに上手くいくとはなあ！」

片方の男はパンパンに膨れたリュックサックを背負っている。

男1「俺とお前の能力があれば銀行強盗くらいチヨロいもんよ！」

どうもこの2人はつい先程銀行強盗を働いてきたようだ。リュックサックの中身は大量の札束だろう。

男2「でもよ……すぐに警備員や風紀委員が追ってくるんじゃないか？」

男1「心配ねーよ。俺たちはレベル4の能力者だぜ？どんな奴が来たって撃退してやりやいいんだ」

男2「それもそうか。ハハハ……」

男達はお互いを見て笑いあった。

その時、

？「待て、その2人。」

前の方から男の声が聞こえてきた。

強盗2人は前を向く。

そこにいたのは1人の青年だった。

着ている服は普通の学生服だが、服の袖は和服のように長い。

長袖のジーンズをはき、ジーンズの上から右足のほうにだけ鎖を巻き付けている。

服装も異様だが一番異様なのは髪の色だった。

大半は普通の黒色なのだが右目にかかる部分だけが炎のような赤色をしている。

そんな異様な姿の青年を見た強盗は一瞬戸惑ったが、

男1「……何だてめえ」

強気な態度を崩さずに青年を睨み付けた。

青年は強盗達に右手を差し出した。《腕章》がよく見えるように。

？「ジャッジメント風紀委員だ。神妙にお縄につきな、銀行強盗さん？」

青年はニヒルな笑みを浮かべた。

男2「ちくしょう！もう来やがったか！」

男1「焦るなよ。相手は1人。すぐにねじ伏せればいいさ」

そう言っただけ片方の男は左手を前に出した。

すると左手から火の玉が現れた。

男1「俺たちは2人ともレベル4の発火能力者なんだよ！燃やされたくないけりやとつと失せやがれ！」

男は自信たっぷり、と言った様子で青年に言った。

自分の能力が強力であることからの余裕だろう。

？「へえ、レベル4か。そりゃすごい。」

青年は多少驚く仕種をしたが、すぐに強盗を見て、

？「けど俺もレベル4なんだよね。しかもパイロキネシスト」

それだけ言っただけ青年は右手に炎を纏わせた。

？「そろそろお喋りはやめにしようか。アンチスキルもそろそろ追いつくだろうし」

？「ただ、最後に1つだけ注意しておいてやろう」

？「俺に力を向けた以上――燃やされるのはお前らだ。」

――

男1「……ありえねえ」

いつから意識がなかったのだろうか。

男が目を覚ましたとき、そこは車の中だった。アンチスキルの使用する護送車だ。

男とまだ意識のない相棒の手にはしっかりと手錠がかけられている。

男1「そうだ……俺たちはあの風紀委員のガキにやられて……。」
ジャッジメント

男はどうか気絶する前のことを思い出そうとする。だがそこに

？「じゃあ後はお願ひします。」

車の外からさっきの青年の声が聞こえてきた。

男はすかさず車に耳を当て声を聞いた。

？「おう、お前もご苦労だったじゃん」

もう1人女の声が聞こえてきた。恐らくアンチスキルだろう。

？「しかし相変わらず凄い威力じゃん。新たなレベル5になる日も近いんじゃないか？」

？「かもですね。まあ期待せずに待ってみますよ」

どうやらさっきの青年は相当の能力者らしい。新たなレベル5になる日も近い……それほど言えるのなら同じレベル4の自分たちが負けたのも納得だ。

……待てよ。ジャッジメント風紀委員で、レベル4の発火能力、レベル5に匹敵する力……。

1人だけ思い付いた。その条件に当てはまる奴が。

もし俺の推測が正しければ、俺たちはとんでもない奴に勝負を挑んだことになる。

そして次に聞こえた会話で……俺の推測は確信に変わる。

？「多分あの2人そろそろ起きてますよ」

？「なんでそんなことわかるんじゃない？」

？「勘ですよ。しょっちゅうあの手の輩を相手にしてるとなんとなくね」

？「はっ！さすが、言うことが違うじゃん」

？「そりゃあね、これでも《風紀委員長》ですから」

さて、これでプロローグはおしまい。

ジャッジメントこれが風紀委員の頂点……《風紀委員長》であり、レベル4オーバーヒート紅蓮皇帝と呼ばれる男の物語の始まりである。

ブログ（後書き）

基本的に自分には文才がないので、グダグダな感じになるかもしれませんが、それでもよければどうかお願い致します。

第1話 風紀委員長（前書き）

第1話からいきなりゴチャゴチャな展開になった？

文才が欲しい……？

第1話 風紀委員長

とあるビルの一室……

そこに2人の人影があつた。

1人は大量の書類を一枚一枚手に取り、目を通してから判子を押し
ていく。

もう1人は竹刀を持ち、床に座り座禅を組んでいる。ピクリとも動
かない。

？「……葵」

書類処理をしていた男がもう1人に呼びかける。

葵「……」

？「……冬空葵？」

葵「……」

？「あゝおゝいゝ？」

葵「……うるさい。座禅中に話しかけるな」

執拗に名を呼ばれた女性……ふゆらあおい冬空葵は、男を睨み付けた。
？「座禅なんかしてないでさ、こっち手伝ってくんない？見るよこ
の書類の山」男は山のように積まれた書類を指さす。

葵「それは風紀委員に対する苦情や意見だろ？それは私の判断でどうこうできるものじゃない。風紀委員長であるお前がちゃんと見る」

葵は男に冷たく言い放つ。

？「んだよ、名字の通り冷たい事を言うんじゃないよ、切なくなるだろ」

葵「そんなこと言ってる暇があるならさっさとその書類を片付けたらどうだ？そんなペースだと残業確定だぞ？」

？「……それは嫌だな……仕方ない。パッパと終わらせますか」

そう言つて男は再び書類処理を始める。

葵もまた目を閉じて座禅を再開するのであった。

その後しばらく男が作業を続けていると、

）
）

携帯が鳴り始めた。男はすぐに画面を見る。

？「透堂から？あいつ今日は休みの筈だが」

男は疑問に持つが携帯に出る。

透堂「あつ、もしもし、委員長すか？」

？「透堂、なんの用だ？ただの冷やかしだったらオメー許さんぞ？」

透堂「いやいや、ちゃんと用事がありますって」

透堂と呼ばれた男は語りだす。

透堂「あのですね、ちょっと今怪しい三人組を発見しまして」

？「怪しい三人組？」

透堂「はい、なんかいかにも銀行強盗企んでそうな……。それで一応能力使って尾行してるんですけど、これからどうしたらいいですね？」

透堂の質問に男は多少迷う素振りを見せたがすぐに

？「とりあえずそのまま尾行しとけ。それと現在地逐一連絡しろ。今から俺もそっち行くから」

そう言った。

透堂「はあ……わかりました。じゃあこのまま尾行してますんで、早く来てくださいね」

そして透堂との連絡は切れた。

？「葵、ちょっと行ってくるわ。留守番頼むな」

葵「まだ書類片付いてないのに出掛けるのか？」

葵はそう言ったが、実質ほとんどの書類は片付いていた。山は最初の十分の一くらいしかない。

？「このぐらいなら帰ってきてからでも間に合うさ。だから行ってくる」

葵「そうか、じゃあいつてらっしゃい」

葵は男に対して笑みを浮かべる。それに対して男も

？「おう、いつてきます」

笑みを返すのであった。

一方そのころ……

？「お姉さまっ！さあさあ、遠慮なさらずに、さあっ！」

ツインテールの娘……白井黒子（しらいぐろこ）がお姉さま……御坂美琴（みさかみこと）に先ほど購入した自分のクレープを差し出していた。

御坂「いらないうって言うてるでしょ！なによ生クリームと納豆のトッピングって！」

御坂は必死に拒絶している。確かに納豆と生クリームのコラボは非

常にいただけない。

黒子「一度食べれば病みつきになりますの！騙されたと思って、さあ！」

黒子はしつこくクレープを差し出してくる。だがそこには別の目的があるようで、

黒子「これでお姉さまがクレープを食べれば、お姉さまと間接キスが……ぐふふ……」

黒子は自分の本心がただ漏れなのに気づいていない。もちろんそれを聞いていた御坂は、

御坂「ふーん……そんな魂胆があったわけ……」

黒子に問いかける。その表情は笑っているが、目は全く笑っていない。

黒子「はっ！ち、違いますのお姉さま、今は、その……」

御坂「問答無用！」

御坂は黒子の両頬を掴みそれを思いきり左右に引っ張る。

黒子「いひゃい！いひゃいでしゅのお姉ひゃまあ！」

黒子は涙目になりながら御坂に訴える。

しかし御坂は変わらずに黒子の頬を引っ張り続ける。

？「仲良しなんですね。あの2人」

？「初春、あれをどう見たらそんなセリフが出るの？」

そんな2人を近くのベンチでクレープをほおばりながら見ている人物が2人。

1人は初春ういはるかざり飾利。頭の上の活け花？がポイントである。

もう1人は佐天涙子。先程の初春の見当違いの発言に対してジト目で初春を見ている。

初春「でもよかったですね、佐天さん」

いきなり話の方向を変えてきた初春。だが佐天は一瞬なにがよかったのかわからなかった。

佐天「えっ……なにが？」

初春「御坂さんですよ。お嬢様のイメージとはちょっと違ってたけど、とっても親しみやすくて」

佐天「んっ……どうなんだろうね……」

佐天は御坂に会う前、レベル5の人間の事を「能力をかさにきて周りの人を見下すいけすかない奴」だと思っていた。
だから御坂をいまいち信用しきれないのである。

現在御坂はリアルタイムで後輩の頬をつねっているわけだし。（後輩が原因なわけだが）

佐天「あの光景見るとどうもね……」

初春「あはは……」

初春は苦笑いを浮かべた。

だが佐天に視線を向けたとき、佐天の先に見覚えのある人影を見つけた。

初春「……あれ？ すいません白井さん」

黒子「なんでしゅの初ひやる？」

初春「あれって透堂先輩じゃないですか？」

初春に言われて黒子も見してみる。

そこには銀行に入ろうとしている黒い制服を着た1人の青年の姿があった。

御坂「……誰？」

御坂も視線を向けていたようだ。この時手の力が緩んだのか、ようやく黒子の頬が解放された。

黒子「あら本当、透堂先輩ですの」

黒子は頬をさすりながら言う。

佐天「初春、誰なのあの人」

初春「ジャッジメント風紀委員の先輩ですよ、佐天さん」

初春の説明に黒子がさらに付け足す。

黒子「風紀委員本部所属、透堂とうどう三先輩ですの」

佐天「へえ、本部所属！なんか凄そう！」

佐天のテンションが上がり、今にもピョンピョン跳びはねそうだ。

初春「別にそんなに凄くはありませんよ。やってることも私たちと変わりませんし」

佐天をなだめるように初春が話す。

御坂「じゃあ何でわざわざ本部なんて仰々しく言ってるのよ」

黒子「そりゃあ委員長がいるからですの」

黒子は手元のクレープを頬張りながら話す。

御坂「委員長？」

黒子「そうですの、風紀委員の頂点、風紀委員長ですの」

佐天「あの、やっぱり風紀委員長ってクールな人なんですか？こう書類持って眼鏡かけて……」

佐天の委員長のイメージはそんな人間のようなようだ。
そんな目を輝かせる佐天に対し黒子は

黒子「クール？とんでもない、その真逆ですの。すぐ怒りますし、服装はだらしないですし、外見だけ見ればスキルアウトと間違われてもおかしくないですの」

？「ふーん」

今相づちをうつたのは御坂でも初春でも佐天でもないのだが黒子は気づいていない。

黒子「委員長は外見ばかり立派で中身が伴ってないですの。別に仕事ができないわけではないのですが、やはり精神年齢が子供ですの。まあ言ってしまうえばお子さま、なんですの……」

御坂「黒子、後ろ」

黒子「はい？後ろ？なにかありますのお姉さ……」

そこまで言って黒子は固まった。

？「白井……お前俺のことお子さまとか思ってたんだ……ふうん……」

黒子「い、い、い……委員長おお！？」

黒子は委員長が後ろから現れたことにめちゃくちゃ驚いていた。ちなみに委員長はすごく黒い笑みを浮かべている。確実になにか企んでいる顔だ。

？「そおんな事考えてるのはこの頭かあ？んん？」

黒子の頭をガツシリ掴みアイアンクローを決める。

黒子「痛だだだ！お辞めください、委員長あゝ！」

黒子の体は宙にぶら下げられ、抵抗ができない。
しかも痛みあまり演算できない。

？「つたく」

手を離すと黒子はなにかするまでもなく、地面に落ちた。頭を抱えて悶絶している。

御坂「えーっと……何？この状況……」

佐天「さ、さあ……」

状況についていけず呆然としている御坂と佐天。

初春「こんにちは、委員長」

？「はい、こんにちは初春」

初春は慣れているようで特に気にすることもなく委員長に挨拶した。

？「……ん？そっちの2人は友達？」

初春「はい、そうです」

？「ふーん」

委員長は御坂と佐天に近づくと手を差し出してきた。

？「はじめまして。風紀委員長、紅羽あかはねえんじゅ炎樹です」

委員長……紅羽はニツコリと笑った。

紅羽「よろしくね」

第1話 風紀委員長（後書き）

次回は銀行強盗撃退の話です。バトルパートは苦手ですが頑張ります？

第2話 レベル4 紅蓮皇帝へオーバーヒート

黒子「……それで？どうして委員長が持ち場を放り出してこんな所にいますのでしょうか？」

アイアンクローをくらった頭をさすりながら黒子が問う。さっきも頬をつねられたり散々な扱いである。

紅羽「持ち場は葵に任せてあるから問題ない。それに暇にあかせてここにいるわけでもないぞ」

黒子「ではどういう訳か教えてくださいな」

詰め寄る黒子を片手で押さえながら紅羽は話す。

紅羽「その関係でさ。お前らこの辺で透堂見なかったか？」

初春「ああ、透堂先輩ならさっきその銀行に……あれ？」

銀行の方を向いた初春は首をかしげる。さっきまで開いていた銀行のシャッターが閉まっていたのだ。いくらなんでもまだ早すぎる時間帯だ。

佐天「あれ？さっきまであの銀行開いてなかったっけ？」

初春「ですよ……なんで閉まってるんでしょうか？」

紅羽「あ……これは予感的中ってやつか？」

紅羽は額に左手をあて、呟いた。その呟きを聞いていた御坂が、

御坂「なに？予感ってどういう事？」

と詰め寄ってくる。

紅羽「まあかいつまんで言うとな……」

紅羽は話した。透堂からの電話の内容を。

黒子「……とすると、その怪しい三人組は本当に銀行強盗を企てていて」

佐天「今まさに銀行で行動しているって事なんですか？」

紅羽「ま、その可能性が一番高いだろ」

紅羽の言葉に初春が焦りだす。

初春「そんな落ち着いてる場合ですか！？急いで何か対策をたてないと……」

紅羽「こんな時だから落ち着くんだよ、初春。変にテンパってると守れるものも守れなくなるぞ」

そう言われて初春も多少落ち着きを取り戻す。

初春「そ、そうですね。すみません」

初春が落ち着いたのを確認し、紅羽はさらに言う。

紅羽「出来れば犯人が外に出てくる前にケリをつけたいな」

紅羽の言葉に佐天が疑問を持つ。

佐天「どうしてですか？」

紅羽「周り。よく見てみな」

佐天「周り？……あつ」

周りを見回してみても佐天は気づいた。周りには社会研究かなにか、大勢の子供達がいたのだ。

紅羽「せっかくの楽しい学園都市見学。台無しにするわけにもいかないだろ」

御坂「へえ……結構色々考えてるのね」

紅羽の判断に御坂を含め四人は感心するばかりだった。

紅羽「初春。透堂は本当にあの銀行に入ってたのか？」

初春「はい、それは間違いないと思います」

紅羽「……白井。お前の瞬間移動で銀行の中に入れるか？」

レポート

黒子「無論ですの」

紅羽は少し考えた後、黒子と初春に指示を出した。

紅羽「白井、お前は瞬間移動テレポートで銀行内に入り透堂と協力して犯人の相手をしろ。ただし圧倒しすぎるなよ。切羽詰まった奴はなにをしでかすかわからん」

黒子「つまり互角の戦いを演じろ、と？」

紅羽「そうだ。最優先事項は銀行内の人達の安全の確保だ」

テキパキと指示を出していく紅羽。さすがは風紀委員長、と言ったところだろうか。

紅羽「その間に俺と初春で子供達を避難させておく。避難がすんだらシャッターをおもいつき叩く。そしたらすぐに犯人を確保しろ」

黒子「了解しましたの」

言うやいなや黒子はすぐに消えてしまった。瞬間移動テレポートで銀行内に入ったのだろう。

紅羽「いくぞ、初春。迅速に避難させろ」

初春「はいっ！」

2人もすぐに仕事に取りかかった。が、紅羽がすぐに振り向いておいてけぼりの御坂と佐天に一言だけ言った。

紅羽「お前たちも避難しとけ。巻き込まれても知らねーぞ」

それだけ言って紅羽はさっさと行ってしまった。

佐天「……え〜っと……とりあえず言われたとおり避難します?」

御坂「え?ん?……大丈夫でしょ。外での捕り物にはならないみたいだし」

御坂はそれらしい事を言うが、実は紅羽の結構な命令口調に対するちよつとしたプライドの反抗心だったりする。

御坂「それにいざとなったら私が佐天さんを守ってあげるから」

御坂は笑顔で佐天に言った。もちろんこの言葉に悪意など微塵もないだろう。

佐天「えっ……あ、ありがとうございます……」

だが御坂は知らない。その言葉を聞いた佐天の顔がわずかに曇ったことを。

佐天（守ってあげる、か……）

所変わって銀行内。

透堂（……委員長、早く来てくれないかな……）

透堂はそんな事を考えながら自分の尾行していた銀行強盗（確定）を見ていた。

今透堂は縄で縛られたりしていない。かといって銃を人質に向けられて脅されているわけではない。

言ってしまうえば、銀行強盗には透堂が見えていないのだ。

透堂は自信の能力、『色素脱色』『クリアリング』を発動しているからだ。

この能力は一言で言うと、透明人間になる、と言う至ってシンプルな能力だ。

詳しく説明すれば長くなるので割愛しよう。

透堂（相手は3人。迂闊に攻撃してもすぐに制圧できるわけじゃないし……）

透堂の能力は奇襲や混乱時には最適だ。だが今の状況ではあまり意味を成さない。さらに、

透堂（下手に攻撃して一般人に手を出されても困るしなあ）

何より避けたいのは、透堂による攻撃が、巻き込まれた一般人の能力だと思われることだ。

そんな理由で透堂は迂闊に手が出せない状況にいた。

透堂（委員長、いや、この際誰でもいいから助太刀してくれ）

神にでも願うかのように透堂は天を仰ぎ見た。まあ天といっても天井だが。

だがそんな透堂の願いが通じたのか。

天女（黒子）が舞い降りた。

強盗A「なっ、なんだあ!？」

いきなりの黒子の登場に強盗も驚いた。

黒子「ジャッジメント風紀委員ですの!銀行強盗の現行犯で拘束いたしますの!」

黒子は右腕の腕章が見えるように右腕を体の前に出す。それを見た強盗達は多少たじろいだ。

強盗A「ジャッジメント風紀委員!?!いくらなんでも早すぎねーか!？」

強盗B「ちくしょう!なんでこんなに早くばれたんだ!？」

強盗C「落ちつけ!こんなガキ一人どうってことはねーだろ!」

最後の一人の言葉を聞いた黒子は少し不機嫌になり、

黒子「そういう三下の台詞は死亡フラグですわよ?言葉には気をつけなさい」

そう強盗に言った。本当はすぐにでも蹴りかかってやりたかったが、紅羽の言葉があるので迂闊には手を出さない。

強盗C「……ケツ！偉そうなこと言ってるじゃねーよガキが！」

強盗が持っていた銃を向ける。

ただし黒子にはない。一般人にだ。

黒子「……っ！」

強盗C「ほら、テレポートでも何でもやってみろよ！その前に俺の銃が火を吹くけどなあ！」

完全に勝ち誇ったように強盗が黒子を挑発する。

黒子ならテレポートを駆使して銃を破壊することもできるが、失敗した時のリスクを考えるとおいそれと手は出せない。

強盗C「ぎやははは！ほらどうしたよ！かかってこいよ、ジャッジメント風紀委員さんよお！」

黒子は何も出来ない事をわかっているからか、強盗はすっかり油断しきっていた。隙をつけば簡単に倒せるくらいに。

透堂「じゃあお言葉に甘えて」

強盗C「は？」

強盗がその声に気づいた頃にはもう遅い。

透堂は強盗達が黒子に釘付けになっている間にこっそりと強盗達の近くに移動していたのだ。

ポカンとしている強盗の顔面に全力の左ストレートをくらわした。強盗は防御もできず、もろにストレートをくらい吹っ飛ばされた。

その際銃も放してしまった。

強盗A「なっ、なんだあ!?!」

強盗B「一体なにが起こりやがった!?!」

ストレートをくらった強盗はそのまま気絶し、残り二人の強盗は慌てふためいた。

透堂「こっちですよ、こっち」

強盗達は声のした方向を向く。
そこには誰もいなかった。だが少しずつ人の姿が見え始めた。そして数秒で一人の人間が現れた。

透堂「ジャッジメント風紀委員です。おとなしくしててください」

『色素脱色』《クリアリング》を解いた透堂は黒子と同じように右腕の腕章を強盗に見せる。

強盗A「ぐうっ……ちくしょう!」

強盗の一人が右手をつき出す。
すると男の手から炎が現れ、それは火の玉となった。

透堂「こいつ……バイロキネシスト発火能力者か」

黒子「あの規模なら……レベルは3、といったところでしょうか」

二人は火の玉を出されても冷静に分析する。少しは驚いたりするも

のだろうが、二人とも能力を向けられるのは慣れているのだ。

一方、火の玉を出して武器を確保できた強盗ではあるが、その頭の中は未だに混乱していた。

強盗A（どいつを攻撃すればいいんだ！？ツインテールのガキか！？カメレオンもどきの奴か！？それとも従業員か！？）

誰に狙いを向けても捕まる。従業員を攻撃すれば二人がかりの制裁が待っている。かといって風紀委員ジャッジメントを攻撃しても避けられる可能性が高い。

強盗A（どうすればいい……どうやってこの場を逃れれば……）

そこまで考えてふと強盗は気づいた。

強盗A（……そうだ。もう金はバッグに詰め込んだ後なんだ。だったら風紀委員ジャッジメントなんか相手にする必要……）

強盗A「ねーじゃねーかよ！」

そう言つて強盗は火の玉を構える。

それを見た黒子と透堂も身構えた。

だが二人とも火の玉を避ける自信はあつたし、従業員が狙われた場合は最悪自分を盾にしてかばうつもりだった。

だが火の玉は黒子にも透堂にも従業員にも向けられなかった。

その火の玉は――閉じられたシャッターへとぶつけられた。

視点は変わって銀行外。

紅羽「……よし。こっちは避難し終わったな。初春、そっちはどうだ？」

初春「こっちも無事避難完了しました」

二人はあの後二手に分かれて避難誘導にあたった。そのおかげで避難は比較的早く終わったようだ。

紅羽「初春、お前に出来ることはここまでだ。少し離れとけ」

初春は少しうつむいたが

初春「……はい、わかりました」

それだけ答えた。本当は自分も戦いたかったが、自分はバックアップが専門で何の力も持たない。

仕方ないのだ、初春はそう自分に言い聞かせた。

佐天「おゝい、初春」

ふと、自分と呼ぶ声がしたのでそっちを向いてみると佐天がこっち

に手を振っていた。

初春「って佐天さん！？何で避難してないんですか！？」

佐天「いやゝ私は逃げようって言ったんだけどね？御坂さんがさゝ」

初春「御坂さんのせいにしないでください！ほらっ早く逃げてください！」

初春は佐天の腕を引っ張り、避難を促す。

御坂「大丈夫よ、初春さん。佐天さんは私が責任をもって守るから。もちろん初春さんもね」

佐天「ほら、御坂さんもこう言ってくれてるし」

初春「……はあ、わかりました。そのかわり危険な事はしないでくださいね」

御坂の口添えもあつて初春は渋々了承した。

御坂「ところで初春さん、聞きたいことがあるんだけど」

初春「はい、なんでしょうか？」

御坂「あの委員長って強いのか？」

初春は御坂からそんな質問が来るとは思っていなかったのか、

初春「え？委員長……ですか？」

と聞き返した。

御坂「そう。やっぱり委員長って言うからにはすごい強かったりするの?」

初春「……そうですね。少なくとも負けたところを見たことはありませんね」

初春がそこまで言うのと佐天が口を挟んできた。

佐天「ねえ、じゃあ紅羽さんの能力ってどんなの?」

初春「委員長はですね、レベル4の……」

初春がちよつといいかけたその時

辺りに轟音が響いた。

三人はすぐに轟音のした方向を振り向く。

見るとそこにはさっきの銀行があつた。

シャッターは吹き飛び銀行内からは煙が出ていた。

その光景から何かが爆発したのだとわかる。

初春「そんな!どうして爆発なんて!?!」

御坂「多分……強盗の中に能力者がいたのね」

慌てる初春と冷静に分析する御坂。佐天は真つ青になっている。

佐天「ねえ……紅羽さんは？さっきまであの近くにいたはずなんだよね？」

佐天の言葉に御坂はハツとした。

もしあんな爆発に巻き込まれれば只ではすまない。

能力で防げれば問題ないがそうでなければ大惨事だ。

御坂「大丈夫よね、あの委員長……」

―銀行内―

黒子「くっ、あの男直接シャッターに攻撃するとは！」

透堂「くそっ、煙で周りが見えねえ」

強盗A（よし、この混乱に乗じれば上手く逃げられるぜ）

強盗の発火能力によってシャッターを爆破、それにより煙が出て視界を奪っているのだ。

強盗A（おら、今のうちにずらかるぞ。さつさと金持て）

強盗B（了解つと）

片方の強盗が金を持って脱出しようとする。

相手には瞬間移動能力者がいるが、相手の目の届かない所に逃げてしまえば問題ない。

これで俺たちの勝ち。そう確信した。

相手が二人だけだったなら。

次の瞬間、いきなり強盗Bの顔面にハイキックが炸裂した。

強盗Bは二メートルほど後ろに吹き飛ばされ、そのまま柱に激突した。

ピクピクと痙攣し、白目になっているので気絶したのだろう。

紅羽「ったく。いきなりシャッター爆破するとか勘弁してくれよ。

周りに一般人がいたらどうする気だったんだ」

そのハイキックを放った本人――紅羽炎樹は不機嫌な表情で立っていた。

爆発に巻き込まれたにも関わらず、ダメージがあるようには思えない。

強盗A「なっ……そんな馬鹿な……」

強盗Aの頭には驚愕しかなかった。
自分は確かに全力で能力を使った。
並の人間なら軽く吹っ飛ばせる破壊力のはずだ。
なのに目の前のこの男は大怪我どころか火傷一つない。

そんな混乱している強盗Aに紅羽はとどめの一言を放つ。

紅羽「もう逃げ場はねーよ。観念しろ」その一言が、引き金になったのか、

強盗A「ちくしょうがああああ!!」

強盗Aが再び火の玉を作り紅羽にぶつけようとする。

強盗A（俺はレベル3の発火能力者だぞ！それをくらって無傷な筈がねえ！）

火の玉を振り上げる強盗Aに対して紅羽は何のアクションも起こさない。

対抗しようとも避けようともしない。
ただ突っ立っているだけである。

紅羽「お前さあ、一つだけ言っておくぞ」

紅羽は動かない。火の玉が自分に向けて発射されても、それでも紅羽は動こうとしない。

紅羽「俺を相手にそれで戦うのは、愚の骨頂だ」

瞬間。火の玉が一瞬で霧散した。

無論、強盗Aが能力を解除したわけではない。
現に一番驚いているのは強盗Aだ。

強盗A「なっ……なんで……」

強盗Aは再び火の玉を作る。
だが今度は作った瞬間すぐに霧散してしまった。

強盗A「なんでっ！なんで消えちまうんだよ!？」

何度火の玉を作っても、すぐに消えてしまう。
自分の意思とは関係無しに。

紅羽「お前、レベルは3つてところか？」

紅羽が強盗Aに歩み寄って行く。

紅羽「それだけの力があるなら他に出来ることだってあった筈だろ」

一歩ずつ、強盗Aに近づいていく。

紅羽「なのになんでこんなことやってんだよ。なんでこんなことしか出来なかったんだよ」

紅羽の言葉に怒気が含まれていく。

強盗Aは足がすくんで動くことができない。

紅羽「力の使い方を間違えんな。こんなことよりも真っ当な力の使い方はいくらでもあんだろーが!」

本気で怒りながらさらに近づいてくる。

強盗Aは後ずさるうとするが、足が言う通りに動いてくれない。結果、紅羽はあつという間に強盗Aの目の前にたどり着いた。

紅羽「お前たちは、まだやり直せる。俺なんかと違って、まだやり直せるんだから」

紅羽はそう言つて拳を握りしめ、そして振り上げる。

強盗A「ひっ……」

紅羽「だからもう一度、一からやり直してこい！」

バギイツ！と、鈍い音が響き渡った。

殴られた強盗Aは後方に吹き飛び、壁に叩きつけられそのまま意識を失った。

紅羽は強盗達が全員倒れているのを確認すると、

紅羽「白井、透堂、こいつら縛るの手伝ってくれ」

袖から長めの縄を取りだしのびている強盗達を縛り始めた。

黒子「……いつも思つのですが、委員長的能力は、一体どういう原理なんですか？」

紅羽「さあ？」

質問しながらも紅羽から縄を受けとる黒子に対し紅羽はそうあっさり答えるだけだった。

黒子「さあつて、ご自身の能力でしょう？そんな適当な……」

紅羽「いいんだよ別に……よし、出来た」

白井と話している間に強盗達を縛り終える。
あとは警備員アンチスキルの到着を待つだけだが

紅羽「じゃあ白井、透堂。あとは任せた」

黒子・透堂「はい？」

紅羽のこの発言にはさすがに驚くしかなかった。

紅羽「いやさ、俺今日中に目え通さなきゃならない書類が山ほどあるんだよ」

透堂「いやいやいや！それでも最後まで責任持って警備員アンチスキルを待つのが普通でしょうが！」

紅羽「そこを頼むよ。警備員アンチスキルや統括理事会とかに廻さなきゃならないやつもあるから」

体の前で手のひらを合わせて頼み込む紅羽。

透堂「……はいはい。わかりましたよ。こっちは引き受けます。白井もそれでいいか？」

黒子「まあ……仕事をサボっているわけではないですし、構いませんの」

二人も渋々ながら承諾した。

それを聞くと紅羽の表情が一層明るくなり、

紅羽「悪いな。今度どこかで埋め合わせするから」

それだけ言つとすぐに銀行を出ていつてしまった。

黒子「いつもながらフットワークの軽い人ですね」

透堂「昔っからすぐ行動する人だったからな」

残された二人は確認するように呟いた。

第2話 レベル4 紅蓮皇帝へオーバーヒート（後書き）

御坂や佐天の見せ場ごっそりカット？

もうちよっとな原作キャラも活躍できるように頑張ります。

オリジナルキャラ紹介

あかばねえんじゅ
紅羽炎樹

役職 風紀委員長

年齢 17歳

身長 175cm

強度 レベル4

能力名 オーバーヒート
紅蓮皇帝

容姿

風紀委員長の激務をこなすために高校を中退しているので制服は着ていない。

袖の長い服を着用し、ジーンズの右足の方全体に鎖を巻き付けるという、不良のような服装をしている。

尚、鎖はジーンズから外して鞭のように振り回して武器にできる。

髪型は肩にかかるくらいセミロングで少しはねっ毛がある。

髪色は普通の黒だが右目にかかる前髪は赤色をしている。染めているわけではなく地毛である。

性格

ちよくちよく学園都市をふらついたり、事件に首を突っ込んだりとフットワークの軽い人物。

口調も堅苦しくない飄々とした口調。

「人を助けるのに理由はいらない」と豪語するほど正義感が強いが、人助けのためなら多少の暴力は辞さないスタイルをとる。どうしても必要と判断したならば殺人さえも許容する。

頭の回転が非常に速く、判断力、理解力も高い。その上大抵のことはやれば出来る万能人間。

自分の意見をズバズバ言うが、あまりに包み隠さず言うのでよく相手の怒りを買う。

能力説明 紅蓮皇帝

発火能力系最高の能力。

全身から火を出すことが可能。また、発火に生じる発熱も可能。火を纏った拳で殴ったり、炎を辺りに撒き散らしたり発熱、体内燃焼による身体能力の底上げなど色々な使い方がある。

「火」という物質に干渉することで火を自在に操る事が出来る。ライターの火でも発火能力者の出した火でも「火」であるならば干渉して自在に操れる。爆発的に燃焼させたり鎮火も自由自在。ただ、魔術で産み出した火は微妙なところ。

また、火、熱、爆発による攻撃は一切効かない。限界温度である4000を越える火ならばダメージを与えられるが致命傷にはならない。

火を自在に操ることと火系統の攻撃が効かないことから、「火を完全に支配する能力」と扱われ、紅蓮「皇帝」と言う名がついた。

ふゆそらあおい
冬空葵

役職 学生 風紀委員

年齢 16歳

身長 166cm

強度 レベル4

能力名 フリーズモメント
瞬間冷凍

容姿

背中を覆うほどのロングの黒髪。気分によってポニーテールやツインテールにする。

個人的にスカートは好かないらしく、人前以外では常に長ズボン着用。

上は普通に、通っている学校の学生服を着ている。

顔立ちは非常に整っているが、男子顔負けの鋭い目付きのため、言い寄られることは少ない。

透堂曰く、「すぐくもつたいない。」

性格

紅羽と同じく正義感が強く誰かを助けるためなら自分が傷つくこともいとわない。

その一方悪いことをした人間には割と容赦無く、携帯している竹刀でどつき回す。

口調は堅苦しいが、性格はそんなに堅苦しくない。むしろクラスの

人気者。

ジャッジメント

紅羽とは同じ時期に風紀委員に入り、同じ部所にいたので長い付き合い。そのためお互いのことは大体理解している。恋愛感情の有無は不明。

胸の大きさを気にしていて、固法の真似して毎日牛乳を飲んでいる。
（紅羽曰く「無駄な努力」）

能力説明 瞬間冷凍

瞬間的に物体を凍らせる能力。車くらいの大きさの物なら三秒ほどで完全に凍らせられる。

その代わり凍らせた物体も三秒ほどで解凍される。

また、生物は冷凍できない。

凍らせた物体は非常に頑丈になるので冬空は竹刀を凍らせて強化したり、そこいらで拾った物を凍らせて武器にする戦い方をする。

そのため冬空は能力が無くても並のスキルアウトなら20人ほどいても圧倒できるほど強い。（紅羽は10人くらいなら圧倒）

とっとうわたる
透堂巨

役職 学生 風紀委員

年齢 16歳

身長 170cm

強度 レベル3

能力名 クリアリング
色素脱色

容姿

良くも悪くも個性の無い容姿。黒基調の学生服を着ている。やや撫で肩で周りから頼りない男と見られがち。思いきって茶髪にしてみたが効果は薄い。ただ体格は鍛えているため、引き締まっている。

性格

基本的にあまりテンションの上がない性格。

暴走しがちな紅羽や冬空とは対称的に、一歩引いた目線から物事を見る。

あまり率先して先頭に立つタイプではなく、誰かの後をついていくタイプ。

しかし、いざというときには先頭で指揮をとることもする。

自分の能力についてはあまり快く思っていない。

曰く、「もっと派手な能力がよかった。」

能力説明 色素脱色

簡単に言うとう透明人間になる能力。透明に出来るのは自身を含め、衣服、ポケットに入る程度の大きさの持ち物まで。学園都市の監視カメラなどにも全く感知されないほど完璧に透明化できる。そのため尾行や奇襲に最適。

ただしあくまで透明になるだけなので普通に攻撃は喰らう。また、日向に出ると影が出てしまうので、日影に入らないとすぐにどこにいるかわかってしまう。

レベル3ということもありかなり弱点も多い能力だが上手く使えば非常に強力な能力にもなる。

オリジナルキャラ紹介（後書き）

前回強盗Aの火が消えたのは紅羽が干渉したから、ということになります。

このキャラ紹介はたまに追加されていくかも知れませんがしばらくはこんな感じです？

第3話 幻想殺しヘイマジンプレイカーとの邂逅

紅羽「え？送った書類が違う書類？」

昨日の銀行強盗事件の翌日、紅羽は風紀委員本部でとある人物と電話で会話をしていた。

紅羽「……ああ、本当だ。すみません、昨日急ピッチで用意してたんで、封筒に入れ間違えたみたいです」

あの後紅羽は残っていた書類を全て片付け、アンチスキル警備員や統括理事会にもちゃんと回した……と思っていたらどうもアンチスキル警備員に回した書類に不手際があつたらしい。

紅羽「はは、本当すみません。今からそっち直接渡しに行くんで勘弁してください」

右手に書類、左手に携帯を持って話す紅羽。

紅羽「学校が終わったら取りに行く？いえ、大丈夫ですよ。俺のミスなんですから」ちなみに普通なら学生は学校の時間だが、紅羽は風紀委員長の仕事をこなすため高校を中退しているので、学校にはいない。

紅羽「……はい、じゃあそういうことで。またそっちで会いましょう」

そう言って紅羽は携帯を切った。

紅羽「ちくしょう、とんだ凡ミスだ」

愚痴をもらしながらもパツパと外に出る準備をする。動きに無駄が無いのがさすがと言ったところか。

紅羽「そういえば葵が牛乳買っつけて言ってたな。帰りに買ってくか」

ポケットに財布と風紀委員の腕章を突っ込む。これで有事の際にもすぐに行動できる。

紅羽「さて、さっさと行ってくるか」

そうして紅羽は部屋を出ていった。

せっかくなので紅羽は歩いて書類を渡しに行くことにした。

時計の針は11時を示している。学生がほとんどの学園都市はこの時間帯の道路には人の姿は全くと言っていいほどない。みんな学校で勉強している時間だ。

ちなみに人目につかない裏通りに行けば、そこにはスキルアウトがわんさかいる。

紅羽「このペースなら昼くらいにはつくかな」

ふと空を見上げると、そこには飛行船が飛んでいる。

電光掲示板にはおそらく小学生用であろう、夏休み中の注意事項が流れていく。

紅羽「あんなもんわざわざ電光掲示板で流さなくてもいいだろうに……」

プリントでも作ればいいのに、心の底からそう思った。

学園都市の科学技術は素晴らしいの一言に尽きる。

日用品から重火器まで、学園都市の外とは20年近くの違いがあるらしい。

だが、だからといって科学に依存しすぎてはいけないと紅羽は考えている。

便利だからと言って頼りすぎてはいけない。自分の力で出来るものなら自分の力でやるべき、と言うのが紅羽の考えだ。

紅羽「やれば出来るくせにさぼってんじゃないっての」

飛行船を見ながらそう呟いた。

結局目的地についたのは正午を越す頃になった。まあ大体時間通りだ。

今日は天気がいいからか、外で昼食を食べようとしている人もちらほらいる。

紅羽「さーて、職員室職員室……」

とりあえず校舎の中に入る。それから職員室を目指して歩く。途中に通った教室から

「カミヤん、またフラグを建てやがったんかコノヤロウ！」

「本当に貴様と言う奴は！」

「俺が何したって言うんだ！不幸だー！」
とか聞こえたがスルーした。

そして職員室。

コンコンと扉を叩く。そしてドアノブに手をかける。

紅羽「失礼しまーす」

なんとも気だるそうな挨拶と共に中に入ってしまった。

職員室で一番最初に目に入ったのは一人の教師だった。いや、これを教師と言っているのか。

小萌「あつ、紅羽ちゃん！お久しぶりなのです！」

彼女は月詠小萌^{つぐよみこもえ}。この高校の教師である。……ただしその外見は誰がどう見ても小学生にしか見えない。

紅羽「お久しぶりです、月詠先生。中退以来だから一年とちょっとぶりになりますか？」

けれどそんな外見に困惑することなく、紅羽はうつすら笑みを浮かべて言葉を返した。

何を隠そう、紅羽は中退以前はこの高校に通っていたのだ。その時に小萌とはすでに面識があったのだ。

ちなみに紅羽はエリート校の長点上機学園に行くことも出来たのだが、

「本部から遠いからなにかと不都合」という理由だけで蹴っている。

さて、返事を返された小萌だが、少し膨れっ面になり

小萌「むう、まだ月詠先生って呼ぶんですか？小萌先生って呼んでくれてもオーケーなのですよ？」

紅羽「いえ、やはりそこは礼儀として目上の人を名前で呼ぶのはちよつと……ほら、風紀委員長として模範的な行動を」

小萌「そう言うセリフはまず服装と髪色を模範的にしてから言ってください！ちよつとだけ赤色ってどこの不良さんですか！」

紅羽「服装はともかく髪色は仕方ないでしょう！これ地毛なんだから！」

そんなやり取りを繰り返す二人。

紅羽「違う、こんなやり取りしに来たんじゃない。月詠先生。黄泉川先生どこにいますか？」

ふと用件を思い出した紅羽は小萌に尋ねた。

小萌「黄泉川先生なら、「たまには外で吸うのもいいじゃん！」って言って煙草片手に屋上に行きましたよ？多分そろそろ戻ってくるかと……」

黄泉川「いや、青空の下で吸う煙草もまた格別だったじゃん！」

いきなり扉が開いたと思ったらそこから噂の黄泉川愛穂先生が入ってきた。

紅羽「どうも、黄泉川先生」

黄泉川「おう紅羽、もう来てたのか。待たせて悪かったじゃん」

彼女は警備員である。アンチスキル

しかもレベル3程度の能力者なら盾だけで制圧できるほどの実力者だ。

スキルアウトや風紀委員にもその名前は広く知れ渡っている。ジャッジメント

黄泉川「しかしお前が書類の入れ間違いなんて珍しいじゃん。悪い物でも食ったか？」

紅羽「俺だつてたまには失敗しますよ。人間なんですから」

封筒から5枚ほどの書類を取り出す。

紅羽「これ、本来の書類です」

黄泉川「あいよ、ちゃんと上に渡しとくじゃん」

黄泉川は差し出された書類を受けとると内容の確認を始める。
そしてザッと確認を終えると満足そうに、

黄泉川「うん、今度は間違いないじゃんよ」

紅羽「それは良かった。じゃあ俺はこれで。お仕事頑張つて」

紅羽はくるりと向きを変え、職員室を後にしようとした。

黄泉川「おー、ご苦労様じゃんよ」

小萌「紅羽ちゃん。また学校に戻りたいと思ったらいつでも言うってくださいね!」

紅羽「もつと時間がとれるようになったら考えてみます」

後ろを振り向かず、ヒラヒラと手を振って、そのまま職員室を後にした。

紅羽（後は帰りに牛乳買って帰るだけか）

昇降口を目指して歩いていると、先ほど大騒ぎをしていた教室から「カミヤんがバナナの皮で滑って吹寄の胸にダイブしたにゃー!」
「この女の敵があああ!」「違うって!今のはわざとじゃ……ぎゃあああ!不幸だあああああ!」
このような会話が聞こえてきた。

紅羽（バナナの皮で滑るってどんだけ漫画みたいな展開だよ）

会話の内容があまりにも面白かったためについ教室の扉の前で立ち止まってしまった。

それがいけなかった。

突如、ドガン！と何かを叩きつける音と共に、扉がこちらに迫ってきたからだ。

紅羽「え？」

いきなりの事態に対応できるはずもなく、紅羽はあえなく扉の下敷きになった。

s a i d 上条

上条「不幸だあああああ！」

吹寄渾身の頭突きを喰らい上条^{かみじょうてんま}当麻は叫んだ。

上条当麻は不幸な人間だ。道を歩けば不良にぶつかり、店に入れば事件に巻き込まれ、学校にすればフラグがなんとたと詰め寄られ、昼食になればバナナの皮で滑ってなんだかんだで頭突きを喰らう羽目になる。

とにかく不幸な人間だ。

中にはフラグを建てまくったりしてるので自業自得な不幸もあるが。

今も上条は頭突きを喰らった後、クラスメイトの吹寄^{ふきよせせいり}制裁に首根っこを掴まれている。

吹寄「上条当麻、制裁はまだ終わらないわよ……」

吹寄は恐ろしく怖い笑みを浮かべ、首根っこを掴む手に更に力を加えてきた。

上条「ちょっと待って吹寄！本当にわざとじゃないんです！そもそもあんなところにバナナの皮があるのがおかしいじゃないですか！ちくしょう誰だこんなところにバナナの皮を置いたのは！」

吹寄「そもそも貴様が足下に注意して歩けば済む問題でしょうが！」

上条の必死の弁解も吹寄には届かない。

青ピ「いいぞいいぞやってまえ！」

土御門「フラグメイカーのカミヤんに痛い目見せてやるにゃー！」

上条「助けてくれないのお前ら！？上条さんの周りは敵ばかりでせうか！？」

上条は悟った。周りはみんな敵なのだと。この不幸から救ってくれる救世主はいないのだと。

吹寄「さあ、覚悟はいいわね……」

上条「待つて吹寄さん！ここはもっと平和的解決つてやつを……」

吹寄「問答無用！」

吹寄は上条の必死の言葉をバツサリ切り捨てると上条の体を持ち上げ……

上条「いやああああ！」

教室の扉に向かって上条をぶん投げた。

上条は為す術もなく扉に激突した。

だがそこで予想外の事態が二つおこった。

一つは扉が衝撃に耐えきれず倒れたこと。

もう一つは扉の前に人がいたことだ。しかもその人は扉の下敷きになっってしまった。

上条「……」

上条も吹寄も外野も一瞬で静まり返った。さっきまでのばか騒ぎが嘘のようである。

青ピ「……カミちゃん、終わったな……」

一番最初に沈黙を破ったのは、青髪ピアスの男、通称青ピだった。

上条「何で上条さん！？ここで責められるべきは吹寄では！？」

土御門「人に責任を押し付けるのかにやー！？見損なったぜカミヤん！」

上条「ふざけんなテメエ！今回ばかりは上条さんは完全に被害者だからな！？」

青ピの発言から静まり返った教室が再び騒然となった。

「もし下敷きになったのが災呉だったらヤバイぞ！」

「そしたら上条を生け贄として捧げるしかないよな」「誰だ今生け贄とか言った奴！」

「てゆーかもし災呉だったら止めなかった俺達も全員まとめて説教じゃね？」

「にやー！あの災呉ならそれもありえるぜい！」

「頼む！災呉だけは！災呉だけはやめてくれえ！」

最早下敷きになった人を助けようとする人間はいない。

皆が災呉は嫌だと騒ぎ立てていると、倒れた扉がゴトツ、と音をたてて持ち上がった。

上条達は一斉に扉の方を振り向く。

紅羽「痛つて……まさか扉が倒れてくるとは思わなかったぜ……」

そこに立っていたのは、不良のような服装をした男だった。少なくとも災呉ではない。

上条（よ、よかった……とりあえず災異ガイイじゃなくて本当によかった……）

上条は心の底から安堵した。だが、

少女A「あ……あ……」

クラスメイトの一人がいきなり青ざめだした。

土御門「ど、どうしたにやー!？」

実は風紀委員長の名前や人相はあまり知られていない。なぜなら大々的に名前をさらすメリットがないからだ。

だがそれでも、別に隠しているわけではない。

だから知っている人は知っているのだ。

そして脅えだしたこのクラスメイトは知っている人だ。

今日の前で下敷きになったこの不良みtainな男が、災異ガイイよりもヤバい肩書きの持ち主であることを、

上条達が知るまで後一分。

第3話 幻想殺し「エイマジンブレイカー」との邂逅（後書き）

とりあえず上条さん登場？

不幸がウリの上条さんですが、紅羽との出会いで少し不幸が軽減されていきます。色々な面で？

幻想殺しは次回出ると思います？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7644w/>

とある風紀の紅蓮皇帝《オーバーヒート》

2012年1月14日22時56分発行